

辻 千春 (Chiharu TSUJI)

学位：博士（学術）

略歴：名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻修士課程修了

名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程単位取得満期退学

専門分野：東アジアの表象文化

研究課題：表象文化、植民地文化、異文化接触、中国語教育

【著書】

〈単著・教科書〉

- ・(入門初級中国語テキスト)『場面で学ぶおもてなし中国語』(あるむ、2021年3月)
- ・上記の補助教材『HSK 単語攻略ワークシート』(あるむ、2023年3月)
- ・『空白の美術史 — 植民地下「朝鮮」で見る創作版画』(中日新聞社、2020年2月)
- ・『戦争と年画 — 「十五年戦争」期の日中両国の視覚的プロパガンダ —』(粹出版社、2000年1月)

〈共著〉

- ・『戦争のある暮らし』乾淑子編(水声社、2008年8月)

〈単著・学術論文〉

- ・『『ポストコロナ時代』のオンラインを活用したグローバル教育—科目『e-Tandem Learning 中国語』における授業改善を通して—』(愛知文教大学教職課程研究センター『教育研究』第13号、2023年3月)
- ・『『ポストコロナ時代』の言語教育・異文化交流 — オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して —』(中国語教育学会第20回全国大会準備委員会編『中国語教育学会第20回全国大会予稿集』分科会、2022年6月)
- ・『『中国語ポートフォリオ』+カリキュラム+CCラウンジ (Chinese Communication Lounge)』— 愛知文教大学中国語教育改革プロジェクト：中国語学修意欲の維持・継続と中国語運用能力養成のための‘能動的教育’の実践例として』(中国語教育学会第16回全国大会準備委員会『中国語教育学会第16回全国大会予稿集』ポスターセッション要旨、2018年6月)
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (6) — 朝鮮人美術家による日本の創作版画の修得とその展開について —」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 33、2018年3月)
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (5) — 釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について —」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 32、2017年3月)
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (4) — 仁川における佐藤米次郎の創作版画活動と時局下の蔵書票展の開催について —」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 32、2017年3月)
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (3) — 京城における『朝鮮創作版画会』解散後の展開と『日本版画』の流入 —」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 31、2016年3月)

- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（2）— 京城における日本人の活動と『朝鮮創作版画会』の顛末」（名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 31、2016年3月）
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 — 『朝鮮創作版画会』の活動を中心に —」（名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 30、2015年3月）
- ・「日中両国の報道版画 — 19世紀に現れた錦絵と年画にみる日清戦争の描き方を中心に —」（名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 27、2011年12月）
- ・「日本統治期の台湾における蔵書票の展開」（中京女子大学アジア文化研究所『アジア文化研究所論集』第7号、2006年3月）

【その他】

〈研究発表〉

- ・『『ポストコロナ時代』の言語教育・異文化交流—オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して—」（中国語教育学会第20回全国大会分科会発表、於：宮崎大学、2022年6月5日）
- ・『『中国語ポートフォリオ』+カリキュラム+CCラウンジ（Chinese Communication Lounge）」— 愛知文教大学中国語教育改革プロジェクト：中国語学修意欲の維持・継続と中国語運用能力養成のための‘能動的教育’の実践例として」（中国語教育学会第16回全国大会ポスター発表、於：早稲田大学、2018年6月3日）
- ・「空白の美術史、植民地期朝鮮における創作版画の展開についての研究」について」（第21回版画史研究会特別講演会講師、於：東京古書会館、2016年11月）

〈社会活動〉

- ・名古屋大学博物館第37回企画展「春を迎える — 年画に込められた願いと意図」の展示協力及び指導（展示期間：2018年2月6日～5月12日）
- ・名古屋大学博物館第37回企画展講演会講師（演題「飾り絵に耳を澄ませば！？— 中国年画でたどる庶民の願い —」、2018年2月17日）
- ・名古屋大学博物館第37回企画展講演会講師（演題「絵は口ほどにモノを言う！？— 中国年画でたどる政治—」、2018年3月10日）
- ・愛知文教大学公開講座第8回講師（演題「中国の正月の飾り絵を見る・聞く？」、2017年1月19日）
- ・愛知県小牧警察署国際化問題アドバイザー（2016年12月～）
- ・文部科学省 SPH 事業「コミュニケーション能力向上のための中国語会話指導法の研究委託による名古屋市立商業高等学校における中国語会話指導（2016年5月～2017年2月）

【研究資金獲得状況】

- ・2019年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する出版助成」受領（対象書籍『空白の美術史—植民地地下「朝鮮」で見る創作版画』中日新聞社刊）
- ・2015 – 2017 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「空白の美術史、植民地期朝鮮にお

ける創作版画の展開についての研究」(課題番号 15K02181、研究代表者)

- 1999 年度日本学術振興会：科学研究費補助金「研究成果公開促進費」受領 (対象書籍『戦争と年画—「十五年戦争」期の日中両国の視覚的プロパガンダ—』梓出版社)

令和6(2024)年度ティーチングポートフォリオ

氏名	辻 千春	職位/役職	教授/グローバル教育センター長
----	------	-------	-----------------

1. 教育の理念

本学の教育理念に基づき、グローバル化する社会において果敢に生き抜く社会人を有する学生の育成を念頭においている。すなわち、多文化共生社会において必要不可欠である、異文化に対する理解を深化させるとともに、言語（中国語）の基礎力と応用力の修得を、学生が自立的に実施していくように導くことを教育活動の指針としている。学生が自立的に学修活動を実践していくためには、何のために、何をするのか、について学生自身が理解する必要がある、その理解を促すことにこそ教育活動の重点があり、社会人を有する人材を養成する教育機関が果たすべき使命であると考えている。

2. 教育活動の内容

<2023 年度>

春期：

(学部)

- ・入門中国語Ⅰ ・入門中国語Ⅱ ・e-Tandem Learning 中国語 A ・異文化接触論 ・ことばと人文学
- ・アカデミアゼミ A ・アカデミアゼミ C

(大学院)

- ・アジア社会文化研究Ⅰ ・研究指導 C

秋期：

(学部)

- ・初級中国語Ⅰ ・初級中国語Ⅱ ・e-Tandem Learning 中国語 B ・語学研修 (台湾)
- ・e-Global Communication ・アカデミアゼミ B ・アカデミアゼミ D

(大学院)

- ・アジア社会生成論 ・研究指導 B/D

<2024 年度>

春期：

- ・入門中国語Ⅰ ・入門中国語Ⅱ ・e-Tandem Learning 中国語 A ・異文化接触論 ・ことばと人文学
- ・アカデミアゼミ A ・アカデミアゼミ C

(大学院)

- ・研究指導 A/C ・アジア社会文化研究Ⅰ

3. 教育の方法

(1) 語学関連科目 (中国語)

語学関連科目については、本学の学びの体系における主専攻の1つであり、多文化共生を生き抜く上で重要なスキルであるコミュニケーション力の養成や異文化理解の知見の獲得を目指している。その一環として、入門・初級中国語諸科目における基礎的な言語の運用能力の修得は不可欠である。学生にはその必要性について説明し、毎回の講義においては、学生の取りこぼしがないよう、今年度より単元ご

との確認テストを実施し、より学生の修得度の測定の確度を向上させる方法に変更した。また、語学研修が秋期に再開されるため、台湾語学研修を希望通り選択できるように、語学ラウンジへの出席や必修科目の確実な修得を促した。

一方、中国人学生との相互学修科目「e-Tandem Learning 中国語」では、ポストコロナ禍においても、引き続き留学に代替する教育活動となるよう、毎回のアンケート調査などを踏まえ授業方法の改善を行っている（学会、論文で発表）。具体的な改善点としては、日中両国の学生が円滑、かつ継続的にオンライン学修が実施できるように、双方が希望する学修テーマの選定や合同説明会の開催および事前のパートナーとの打ち合わせの実施など、互惠学修開始までの準備を充実させ、開始後の早い段階でセッションの参観を教員が行い、フィードバックによる改善を促すなどのサポートをしている。

「語学研修（中国語）」は、3年ぶりの再開となり、一連の講義の流れも刷新した。渡航前授業においては台湾の社会、文化、歴史に関するテーマを決め、調査結果のプレゼンテーションを課し、現地研修中には、1週ごとの学修到達目標と日々の学修内容について報告書の提出を課した。また、帰国後は、中国語による学修成果のプレゼンテーション大会を実施し、総括報告書の提出を課した。

(2) 教養関連科目

「異文化接触論」は、本学のカリキュラムにおいて「多文化共生を探求する分野」に属する科目であり、学生には中国の庶民文化を題材として、具体的に異文化接触と文化変容の事例を示しつつ講じている。国際間の交流や他文化の理解においては、歴史に関する知見の獲得は不可欠であると考え。そこで、講義中に学生自身に調査、発表させ、それを踏まえて、社会や庶民文化の変容などについて講じるようにし、理解を促すようにしている。また、その一環としてワークショップ（版画の摺り）も取り入れられている。

同分野に属する新設科目「e-Global Communication」は、初めてのオンラインを活用した複数の国家・地域による国際交流学修プログラムであり、海外の日本語学修者との協同学修を通して、「母語話者として他言語修得の困難を知り、多文化共生社会におけるコミュニケーション力や視点を養う」ことを趣旨としている。初年度は中国、台湾、韓国の各大学から各2名が本学のパートナーとして参加した。プログラム実施までに、各大学の担当教員との綿密な打ち合わせを行い、活動内容を国際間に齟齬のないように修正しながら準備を整えた。一方、海外の参加学生および本学の学生への事前研修も、円滑な国際交流学修プログラムの成就に当たり周到に実施した。プログラム開催中は、教員間の連携と学生同士のセッションのフォローなどを通じて効果的な学修活動が展開できるように努めた。また、学生の最終成果として、海外の学生による日本語プレゼンテーション大会の実施を課し、共通目標を達成するための協同学修を通して、異文化間のコミュニケーションにおける他者との関わりについて実践的に学ぶことができるようにした。一方、本学の学生には、同大会においてパートナーの母語で、パートナーの紹介や学修活動に関するスピーチを実施させ、パートナーからスピーチの指導を受けることを通して、言語学修に対する学修欲求にも応じるようにした。

「ことばと人文学」では、学生に教員の研究領域における「ことば」の意義が明快に理解されるよう、具体的事例を示し丁寧に解説し、よりシンプルな内容となるよう情報を整理した。また、活発な意見交換ができるように、グループ討議についての感想を課題の1つとした。

(3) ゼミナール

「アカデミアゼミ」では、教員とのディスカッションや他学生の調査報告を聴くことを通して学生に研究テーマを探索させ、多角的なものごとの見方について理解を促した。また調査技術、執筆技術、プ

プレゼンテーション技術などを段階を踏んで指導するようにしている。

(4) 大学院関連諸科目

院生が自立的に、計画的に研究活動を進めるうえで必要なスキルを養成することを目指し、課題に対する調査を毎週プレゼンテーションさせている。また、修士論文の執筆を成就させるために、研究の進展と執筆を促し、確実に記述までに完成させるように指導した。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

(1) 教育活動の成果

コロナ禍を契機として2021年度より開講した「e-Tandem Learning 中国語A」「同B」は、オンラインを活用した海外の学生とのセッションを含む新規の授業形式であるため、每期、学生の学修成果報告書および学生からの記名式アンケートを分析し、講義の改革を実施している。3期にわたる検討について（2021年度春期～2022年度春期）学会で発表し（中国語教育学会第20回大会）、さらにその検討を踏まえて実施した4期以降の再改善を踏まえた成果を、「ポストコロナ時代のオンラインを活用したグローバル教育一科目「e-Tandem Learning 中国語」における授業改善を通して―」（『教育研究』第13号、1-12p、愛知文教大学、2023年3月）として公刊した。その結果、学生の学修時間が増加し、セッション内容が豊富になったことが窺えた。また学修成果として、異文化交流への理解や、語学修得に対する意欲の向上をあげ、実際に交換留学生として派遣される学生もおり、またHSK受験を実施した学生もいる。

また、新たに開設した国際交流学修プログラム（「e-Global Communication」）は、最終学修成果として日本語によるプレゼンテーション大会を実施し、海外の日本語学修者と協同で共通の目標に向かって学修活動を進展させる中で、異文化に対する理解や配慮、および異文化間コミュニケーションの実践的な学びが得られたことが窺えた。

「語学研修」は、渡航前の調査、研修中の報告書の執筆、帰国後の中国語プレゼンテーションの実施を課した一連の教育活動が、学生に行動管理を促し、自律的に学びを実践で来ただけでなく、教員が学習成果や修得度を確認するうえで効果的であった。とくに、中国語によるプレゼンテーション大会の開催は、優秀者がオープンキャンパスにおいて語学研修のプレゼンテーション担当者として推薦され、活躍していることがその成果の証左となろう。

(2) 評価と改善方策

入門・初級中国語諸科目では、2023年度から一単元終了ごとに理解度確認テストを実施し、学生の理解度を計測し、翌週の講義で補足する方法に変更したが、準備学修をせずに受験をし、向上が見られない学生も少なくなかった。そこで、2024年度からは、確認テストを成績評価の一部とすることで、積極的な学修取り組みを促していきたい。

「語学研修」は、滞在中の学修報告書（一週ごとに学修目標と日々の学修事項について記載）と最終プレゼンテーションおよび学修成果報告書の分析から、現地学生との交流や授業、日常生活などにおいて、語学修得の意義や学修態度の改善、学修意欲の向上、異文化理解の深化などについて、大きな学修成果があったことが窺えた。一方、今般、1年次生と3年次生が同時に参加し、早期に現地研修を実施することで学修モチベーションの向上に資する効果もあるが、反面、中国語の基礎力が高いほど、より効果的に現地学修が展開できることが窺え、実施時期について検討する必要があると考える。

インターネットを活用したリアルタイムの国際交流学修プログラム(「e-Global Communication」)は、3年にわたって実施してきた「e-Tandem Learning 中国語」における経験を踏まえて、周到な準備と学修内容およびフォローを展開し、新たな異文化間コミュニケーションの場を構築できたと考えている。学生からも高い学修満足度を得ており、教育的な効果や手ごたえも十分に感じている。参画した海外の大学の教員および学生から、本学修活動の修了証を就職活動におけるアピールに活用したいとの申し出は、この学修プログラムの優位性を裏付けるものと承知している。一方、集中講義であるため、時間的な余裕がなく、学生はセッションのための事前準備を充分に行うことが困難であった。今年度は、開始時期を早めて、講義期間を延長することで解消していきたい。

「アカデミアゼミ」は、学生が自律的かつ意欲的に研究を展開させるよう導いていることは、9割を超える学生が卒業論文の執筆を希望していることに傍証されると自己評価している。しかしながら、執筆技術については問題が少なくなく、さらにきめ細かく具体的な事例を示しながら指導していく必要があると考えている。

大学院については、修士論文の執筆時間が十分に確保できるように、毎講義で進捗状況を確認し、問題点を議論して、円滑な執筆を促したが、最終的に見直しなどの時間的な余裕がなくなってしまった。今年度は執筆者がいないが、来年度の執筆に備えて適切な時期に執筆に着手できるよう研究の進展を促していきたい。

5. 今後の目標

教育の理念に基づき、多文化共生社会において活躍できる人材の育成を期す。いずれの授業においても、学生に積極的な参加を促すべく、講義内における調査や発言、講義終了後に課題を課すなどし、より自立的、実践的な学修を促していきたい。あわせてこれまで通り学生へのフィードバックを的確に実施し、学修意欲の維持・向上に努めたい。とくに、中国語運用能力の獲得については、HSKの資格取得の単位認定制度が導入されたことで、早期の段階で積極的に学修に励む学生も得た一方で、言語学修に対する意欲の低い学生も一定数あり、さらにきめ細かい対応をしていく必要があると考えている。言語ラウンジ(CCラウンジ)を大いに活用し、より活きた中国語の修得も促していきたい。あわせて、学生が異文化理解や歴史、文化に関する知見を深化させられるよう教育活動に努めたい。